

# 目次

はじめに

## 第1章 人々を取り巻く自然と資源

川の魚と人々	4
耕し、食べるための森	12
先住少数民族の暮らし ～カンボジア・ラタナキリ州の文化・言語の多様性	20

## 第2章 開発のもたらす変化

川を取り巻く現状	28
メコン河流域国での植林	40

## 第3章 講演録

メコン河流域の開発の現状と課題	46
国際河川セサン・セコン・スレポックの人びとの暮らしと開発	49
森を食べる人々とプランテーション	51
メコン河：危機に瀕する大河の多様性	53

## 第4章 メコン流域国と日本

メコン河流域のデータ	56
各国基礎データ	58
日本のメコン河流域国への援助	59

# は じ め に

2008年1月16日、日本政府はメコン河流域5カ国（カンボジア、タイ、ベトナム、ビルマ/ミャンマー、ラオス）の外務大臣を東京に招き、初の「日メコン外相会議」を開催しました。この会議では、「信頼」、「発展」、「安定」をキーワードに、日本とメコン圏との包括的な協力が謳われましたが、とりわけ「信頼」については、相互交流の促進を目的に2009年を「日メコン交流年」とすることで合意しました。メコン圏から多くの人々を日本に招聘し、さまざまな文化行事も予定されているようです。

1年前、この発表に接したとき、私たちは思いました。2009年には日本の市民がメコン圏について聞く機会が増えるだろう。メディアもメコン圏の話題を取り上げる機会が多くなるだろう。それ自体は悪いことではないかも知れない。しかし、日本政府や外務省には、私たちが日ごろ、日本の人々に是非とも知ってもらいたいと感じている情報や視点を提供することはできないに違いない。ならば、その作業は私たちが担うしかない。

私たちメコン・ウォッチは1993年の設立以来、まず何よりも、メコン河流域がすでに持っている自然環境の豊かさに対する認識、そしてその豊かさに培われた人々の生活・文化・思想に対する敬意を活動の根底に据えてきました。そして、そうしたメコン圏の豊かさを脅かす大規模開発に警鐘を鳴らし、日本政府や国際開発機関への情報提供や政策提言を通して、大規模開発が引き起こす環境・社会問題を予防・改善すべく努力してきました。

私たちが昨今メコンの現場で目・耳にするのは、急速な開発や国内総生産（GDP）の上昇の影で、自然環境が劣化し、村人の食糧安全保障が脅かされ、女性や先住少数民族がいつもの困難に直面し、流域国間や国内で経済格差が拡大し、国境を越える環境問題が国家間の軋轢に発展しかねない現状です。これらの問題を知らずにメコンの今を理解することは不可能だし、日本とメコン圏との交流も信頼もあったものではないと思います。

そこで、私たちは、メコン圏で実際にこうした話題に取り組んでいるNGOのスタッフを講師として日本に招き、メコンについて理解を深めることのできる連続セミナーを開催することにしました。メコンに住む人々はよく、開発によって「人と人」だけでなく、「人と自然」との絆が断ち切れようとしていると私たちに語ってくれます。お招きしたのは、そういった声と真摯に向き合っているNGO職員の方々です。

この連続セミナーは、日メコン交流年を少し先取りして、2008年6月に始まり、2009年3月に最終回の第4回が終了したばかりです。第1回では、メコン河本流ダム建設計画を取り上げました。1950年代に計画されて以降中断していた大規模ダム建設計画が1990年代に息を吹き返し、2006年以降、急速な勢いで本格化してきました。これまで最上流の中国をのぞいては、ダム壁が遮らず、水も魚も自由に行き来してきましたが、その流れが11カ所で寸断されかねない事態に直面しています。第2回では、メコン河の支流開発の問題を扱いました。上流でベトナムが建設したダムが国境を越えて、下流のカンボジアに住む先住少数民族に10年以上もわたって甚大な被害を与えてきました。支流で発生した、この国境を越える環境問題は、本流ダム建設によって起こりうる越境環境問題をも想起させます。第3回の話題は森林と女性で、共産主義体制下のラオスで、意思決定過程への女性の参加を目指して活動するNGOの実践や調査について話をうかがいました。また、ラオスの人々の生活にとって森林が不可欠であること、植林と森林とは根本的に違うものであることも重要なテーマでした。企業活動である産業植林は、至るところで環境社会問題を引き起こしています。「植林＝善」で思考停止するのではなく、どこに、どうやって、なんのために、なにを植えるのかを考えなければいけません。最後の第4回では、再び話題をダムに戻して、「ASEANのバッテリー」を目指すラオス政府の電力開発政策の問題点、その政策に深く関与する日本などの先進工業国政府や国際金

融機関の実態、旧来のやり方を改めるための具体策と提案を提示してもらいました。

本冊子は、4回の連続セミナーのまとめであるとともに、セミナーの席では十分にお伝えできなかった部分を補う目的で誕生しました。詳しくは、以下にある「本冊子の内容と構成」をご覧ください。

使命感を持って始めた連続セミナーや冊子の作成ですが、

## 本冊子の内容と構成

本冊子は4部から成り、視覚教材、読みもの、資料としての性格をあわせ持っています。第1章では、現地で集めた多くの写真を通して、メコン河流域の人々が毎日利用する川や森の自然資源の様子、特に人々がそれをどのように手に入れ、どのように使い、それがどのように人々の生活に結びついているのかご紹介します。第2章は、そのような自然環境と社会生活が、外部から持ち込まれる大規模な開発によって、どのように危機に瀕しているかを知っていただくための報告です。河川と森林の存在を根底から脅かすダム開発と産業植林の問題を取り上げ、メコン圏の現状に詳しい海外のNGO関係者や研究者が執筆した文章を翻訳で紹介いたします。第3章は、2008年6月から2009年3月にわたって、「メコン年セミナー」の名前の下にメコン・ウォッチが開催した4回の連続講演会の記録です。当日会場にお越しになれなかった方がたにも読んでいただけるように分かりやすくまとめることを心がけました。最後の第4章には、メコン河・流域国・日本のメコン流域国に対する援助をめぐるデータを集めました。

本冊子では、メコン圏に属すビルマ（ミャンマー）と中国・雲南省については触れていません。また、ベトナムについても、産業植林の動向で扱っただけで、人々の生活の様子にまでは踏み込んでいません。これらのテーマについても、将来の機会に取り上げることができればと思っています。

ここで私たちが伝えることのできるのは、メコンをめぐるほんの一部の情報でしかありません。メコン・ウォッチのホームページでも各方面の関連情報を提供していますが、そこで網羅できない課題や話題もたくさんあります。日メコン友好年に限らず、今後とも日本とメコンの市民社会の相互理解と信頼のために活動を継続させていきたいと考えています。みなさまのご理解とご支援をよろしくお願いいたします。

さまざまな方のご協力によって、本冊子もようやく発行にこぎつけました。みなさまのご協力を感謝します。まず、お忙しい活動の合い間を縫って来日し、強行日程をものともせず各地での講演や交流を精力的に担って下さった講師の方々。冊子の趣旨に賛同して資料や情報を提供して下さったChris LangさんやIR、GDG、TERRAの各団体。資料整理や校正、セミナーに協力して下さった、内山智晴さん、遠藤明子さん、神崎尚美さん、木村祥子さん、橋本彩さん、村上亜衣夢さん、村田麻那さん、山本雄基さん。最後に、自分たちの生活を通して、日本に住む私たちにメコン河の豊かさを教えてくれた数多くの人々にも感謝いたします。私たちとみなさんとの関係が「信頼」と呼べるものになる日が来ることを願ってやみません。

なお、4度のメコン年連続セミナー開催と本冊子の制作・出版にあたっては、独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金から助成をいただきました。ありがとうございました。また、タイやラオスの現場からの情報の一部は、イオン環境財団、トヨタ財団、日本経団連自然保護基金、三井物産環境基金の支援事業を実施する際に得られたものです。この場を借りてお礼を申し上げます。